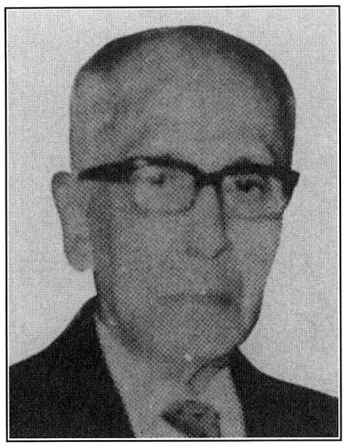


辻本　繁

（1893～1979）

北海道の聾史第１弾

辻本繁の生涯

発表者　　山本　浩之
（日本聾史学会員・札幌聾史研究会員）
玉手　順子
（日本聾史学会員・札幌聾史研究会員）

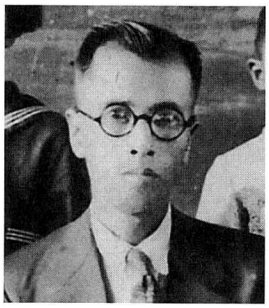
略　年　譜

年　月　日	事　　柄
明治 26 年 8 月 26 日	函館区東川町に 7 人兄弟の長男として出生。4 歳で失聴
明治 35 年 4 月	函館訓盲院に入学する本道の最初の聾児入学
明治 45 年 4 月 1 日	函館盲唖院を卒業すると共に教員に採用される
大正 5 年 11 月	北海道庁長官の推薦状を得て、官立東京聾唖学校師範科へ入学する
大正 8 年 3 月	官立東京聾唖学校師範科を卒業する本道の教員免許状第一号
大正 8 年 4 月	函館盲唖院教師に復職する
昭和 2 年 10 月 31 日	函館盲唖院を退職する
昭和 3 年 11 月 16 日	八雲町砂蘭部（住初町）の借家で八雲聾唖学院を創設し校長になる
昭和 11 年 10 月	室蘭市母恋南町へ学校を移転し、校名を室蘭ろう唖学院と改称する
昭和 14 年 4 月	校名を室蘭聾唖学院に改称する
昭和 18 年 8 月 16 日	第 2 次巡回皇民講習を開く。本部役員の藤本敏文を迎える。
昭和 21 年 11 月 11 日	函館聾唖協会室蘭支部を創立し支部長。仮称日本聾唖中央会の発起人になる。
昭和 23 年 10 月 1 日	道立に移管され北海道立室蘭聾学校に改称し、初代校長に就く
昭和 29 年 3 月 31 日	北海道室蘭聾学校長を退職する
昭和 33 年 11 月 1 日	胆振ろうあ福祉協会（現・伊達聴力障害者協会）結成に参加。相談役
昭和 54 年 5 月 11 日	逝去 86 歳　室蘭市望洋台霊園地に葬られる

辻本 繁の生涯

発表担当／山本浩之・玉手順子

トークショー　証人／山本英男・斉藤道子・畑山フクエ

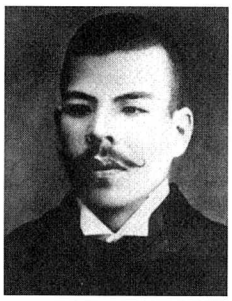


生まれと失聴

1893年（明治26年）函館区東川町生まれ。4歳頃熱湯で頭、顔を火傷した。完治したが、その後突然の熱病で、重体になった。治ることができたが、耳が聞こえなくなった。

残聴程度は、汽笛の音、相撲の太鼓、消防の半鐘、動物の鳴き声がきこえていたと記述。

函館訓盲院時代



1902年（明治35年）9歳 函館訓盲院に入学→ 辻本のために唖生部を設置し、教師の篠崎清次が指導を担当。これが北海道の聾教育の始まりとされる。

1911年（明治44年）18歳 函館訓盲院を卒業

1912年（明治45年）19歳 函館訓盲院の教師に採用→ 沿革史によると弱視者の篠崎清次校長の文書作成や雑務が主な仕事であったという。

東京聾唖学校師範科時代～函館に戻るまで

1916年（大正5年）23歳 東京聾唖学校師範科に入学（図画科専攻）

1917年（大正6年）24歳 在学中に恩師 篠崎清次逝去

1919年（大正8年）26歳 師範科卒業 函館盲唖院に復職（函館訓盲院は明治45年に私立函館盲唖院に改称）→ 北海道のろうあ者教員第1号

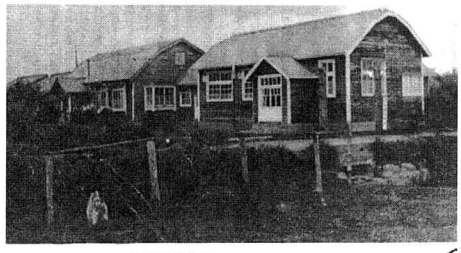
函館盲唖院退職まで

1923年（大正12年）30歳 小松モトと結婚→辻本モト先生のこと

1927年（昭和2年）34歳 函館盲唖院を退職→この事情は本人自身がはっきり述べた資料がない。夫人の話によると、手話教育に疑問を感じていたらしい。

八雲聾唖学院時代

1928年（昭和3年）35歳 私立八雲聾唖学院設立、校長になる→ 当時の八雲町長、収入役、郵便局長、徳川農場長など、八雲町の主な人々はキリスト教会員で心強く感じた。徳川農場の経営者は徳川義親（日本聾口話普及会会長）



八雲聾唖学院
八雲聾唖学院（現、出雲町22番地　川崎平次郎氏）

室蘭へ移転以降

1936年（昭和11年）43歳 室蘭に移転し私立室蘭聾唖学院と改称し、校長になる→移転は、就職先を見つけやすい、職業教育が役に立つなどの事情があった。

1939年（昭和14年）46歳 室蘭ろう唖学校と改称

1948年（昭和23年）55歳 道に移管され北海道室蘭聾学校となり、校長になる

1953年(昭和28年)60歳 道教育功績者に選ばれた

1954年（昭和29年）61歳 校長を退職

校長生活以後

1954年（昭和29年）61歳 室蘭聾学校校長を退職、以降は非常勤講師、PTA副会長

1958年（昭和33年）65歳 胆振ろうあ協会相談役

1961年（昭和36年）68歳 夫人とともに道文化奨励賞

1978年（昭和53年）85歳 夫人とともに講談社吉川英治文化賞（50年の長きにわたり、夫妻協力して聾唖教育に献身し、特に口話法教育にすぐれた成果をあげている。）
1979年（昭和54年）86歳 逝去。(在職26年)
私立八雲聾唖学院（後の北海道室蘭聾学校）の創立者。キリスト教の敬虔な信者。
北海道で聾教育が始まったときの最初の生徒
北海道で最初のろうあ者教員・聾学校長であり、退職時は日本で最後のろうあ者の聾学校長だった。
本人が自分の気持ちを書いた資料がほとんどない
夫人や関係者等が残した資料では、辻本繁の内面はつかめない。
残された資料でわかる範囲では…
・キリスト教信者である（恩師篠崎清次と函館訓盲院時代の影響が強いと感じる）
・口話教育に力を入れた（八雲時代からの学校としての方針）

手話に対する気持ちが綴られている文章
私は恩師の命によって東京聾唖学校師範科に学んだが當時東京の聾唖教育は殆ど手話法であったゝめ、私は学友と會話することが出来ず非常に悲しい思ひをした。のみならず多くの唖生達は「辻本は手話も出来ない」矢張り手真似で軽蔑したので私は残念でならず屡々篠崎先生へ手話法の勉強をしたいといふことを訴へたが、篠崎は頑としてそれを許さなかった。(篠崎先生小傳 昭和八年六月二十日）→ちなみに夫人との会話は、夫人によると筆談か空書
八雲聾唖学院設立の動機について本人の手記（昭和48年）
…母校である函館盲唖院で十五年間教鞭をとって居たが、昭和三年、感ずるところあり、八雲町に移りささやかな学院を設立、…
八雲聾唖学院設立の動機について辻本モト先生の話
…まだ口話は普及しておらず、手話が盛んでした。しかし「種々様々」を教えるのに「種」を種子とか、地名の「青森」を「青い森」というような教え方をする。それは地名でなくなる。混乱する、と辻本は手話教育に疑問を感じ悩んだようです。自分は絵を描き、工作が上手でしたので、それを通しての実物的教授法といった形でやっておりましたから、若い先生の教授法が納得できない。それで自分のやり方でやってみたい。昭和２年、それまで15年７ヶ月勤めた函館をやめ、八雲に行きました。…
辻本に影響を与えた人たち
・恩師 篠崎清次
・夫人 辻本モト
・八雲聾唖院の支援者たち
辻本繁はいろいろな人に助けられている。このことが辻本自身の自己主張をしにくくしているかもしれない。また社会情勢も無視できない。これらを考えると、学校経営の方針も本人の意志がどの程度反映されたのか?
辻本 繁は、どんな先生だったのか？
辻本 モトは、どんな先生だったのか？
両先生から教わった方に聞いてみましょう。
室蘭で辻本先生に学んだ方の思い出
（斉藤道子さん、畑山フクエさん、山本英男さん）